勿凝学問 245

「私はマルキストではない」と言ったマルクスの気持ちが少し分かる今日この頃
Ⅳ巻を読んだ人は、Ⅴ巻も読んでくださいね

2009 年 8 月 18 日
慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

「私はマルキストではない」というのはマルクスの言葉である。今日は、そういう話をしておこうと思う。昨日、長崎から次のようなメールが届く。

> 諫早医師会は、2008 年 2 月 22 日のＨＰに似て非なると紹介されていた病院の張り紙のように[1]、そもそも曲解しているか、『医療政策は選挙で変える』出版後の自民党の政策転換を知らないのか、開業医の代表たる医師会に自民党の政策転換は無縁としているのか。

彼あるいは彼女――それは秘密――のメールの根拠は、次の新聞記事である。

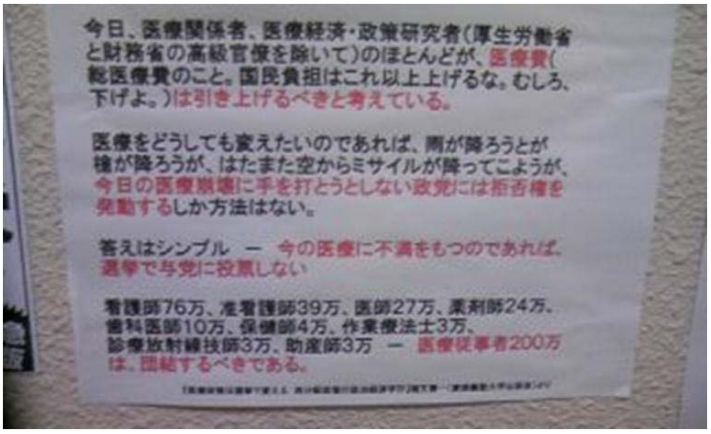
’０９政権選択：きしむ保守地盤／中　医師会、自民離れが拡大

> 「医師会は自民に利用されてきただけ。なのに、上の方だけで自民支持を決めてきた」。「福田推薦」を提示した高原晶支部長（５５）は憤りを隠さない。手元にあった本は『医療政策は選挙で変える』。至るところに鉛筆で線が引かれていた。

マルクスの気持ちが少し分かる（笑）。僕はこれまで、選挙の際に拒否権を発動しましょうとしか言ったことがないわけで、拒否権を発動すべき相手は『医療政策は選挙で変える――再分配政策の政治経済学Ⅳ』を出した 2007 年 6 月から、『社会保障の政策転換――再

---

[1] 卒業生から送られてきた某病院の掲示板に貼られているらしい下記の文言と、Ⅳ巻「はじめに」の文章を比較してください。
似て非なるもの・・・



分配政策の政治経済学Ⅴ』を出した 2009 年 3 月の間に変わっていたりもする。Ⅳ巻だけを読んでもらっていたんでは、困るんだなぁ、これが。

『医療政策は選挙で変える』には、次の言葉がある。

「一九九七年と昨年になされた二つの閣議決定を撤回する姿勢を示せるかどうかだ。九七年の決定は医師数は充足しているとして医学部定員を減らす方針を打ち出した。昨年は社会保障費を五年間で一兆六千億円削減するとの内容。これらが生きている限り、医師は増えず、医療費が今後も削られるのは自明だろう。何も与党批判をしたいのではない。与党が誤りに気付き、自ら方針を変えるなら評価できよう」

ところがその後、与党は誤りに気付いて自ら方針を変え、1997 年と 2006 年になされた二つの閣議決定を撤回してしまった。となれば、2009 年次の僕が、2007 年参院選を前にして掲げた理由で与党に拒否権を発動する必要はなくなる。そして、ここ 2 年ほどの医療問題を取り扱う環境変化の中、どの政党も、医療には気をつかいますとなってきた。この段階、つまり 2009 年現在では、3 月に出した本に書いているように、「この状況で、負担増のビジョンを示さない政党には拒否権を発動するべし」ということが最大のメッセージということになるわけだ。

そして、与党はマニフェストの中で、「2011 年度以降、景気回復後遅滞なく消費税を含む税制の抜本改革の実施」を公約した。他方野党 4 党は、「消費税を 4 年間引き上げない」ことを共通公約とした。そして僕は今すぐにでも、負担増を行ってその増分のすべてを医療・介護、保育・教育という 4 つのサービスに現物給付として使い切ってはどうかと言っている人間なわけ（勿凝学問 172 や勿凝学問 217 などを参照）。

さらに、かつて埋蔵金論議の巣窟であった日医は、与党マニフェストを「財源のあり方に踏み込み消費税を含む税制抜本改革を掲げたことも合わせて評価する」としており、日医のこの評価を僕は、高く評価している。もっと言えば、日医は、民主党のマニフェストを「財源が不明確で不安が大（m3.com のタイトルによる）」としており、僕は、日医のマニフェスト評価は、これまで僕がみたマニフェスト評価の中でも、かなりまともなものだとみてもいる。

人も組織も進化したり退化したりして動くものなんだよ。ある著者がある時点で批判した相手がいつまでもそこに留まっているわけではない。だから評価軸が昔と今で変わらないある著者が書いた一冊の本だけを読んでも、いかほどのことが分かるものやら。だからこそ、読書は楽しいのだし、歴史は面白いとも言えるのだけどね――評価軸があっち行ったりこっち行ったりする著者の本を読むのも、これまた一興ではある。

ちなみに 2001 年に出した本の序章には、次の文章がある。

『再分配政策の政治経済学Ⅰ』序章より p.4.

ところでわたくしは、人物に少しでも関心を持つと、その人物の足跡を調べ、人を一生の長さでながめてしまう癖をもっている。経済学者もご多分にもれず、多くの経済学者の伝記や書簡集などにも目をとおす[2]。

なお、僕は「知名度の割には良い仕事をしている」との生き様に美学を感じるため、常日頃は「知名度分の仕事量極大化行動」をとっており、知名度を低く維持することにも努力をしていたりもする(?)。したがって日吉の学生などは僕のことをまったく知らないし、世の中の人は、僕が『医療政策は選挙で変える』に続いて、『社会保障の政策転換』を出したことを知らないのかもしれない。だから、多くの人が『社会保障の政策転換』を読んでいなかったり、僕の最近の勿凝学問 240 を知らないのも、彼らの不勉強が原因ではなく、僕の知名度の低さが原因なのかもしれないと思っていたりもする。「宣伝しないものは存在しない」というマーケティングの格言は至言だからね――Wikipedia に「知名度は低い」と書いてあって、いじけて言っているわけではないですからね。。。

と言っても、僕は、「○○の条件を満たす政党には拒否権を発動しましょう」としか言ったことはなく、今度の選挙では、総合的に判断した後に全政党ダメだこりゃと思って、どこかに遊びにいくかもしれないですけどね。とにかく票が欲しいと言って、なりふり構わぬ就職活動――権力闘争という言葉を使ってあげるのももったいない気がするので、最近は、政治家の就職活動と言っている――を展開している政治家さん達を牽制するには、主体的浮動票、主体的棄権、これらいずれも重要な政治的意思表明の方法だと思っている。

---

[2] この文章は、次のように続いていく。

「そこでおぼろげながらに思うことがある。それは、経済理論というのは、ようするに価値判断が一つの体系にまとめられたものであって、その価値判断の根差すところは、つきつめていくと、強い個性をもつ偉大な研究者ひとりひとりの好き嫌いに帰着するのではないだろうかということである。

そして、彼らの気質が陰に陽に映しだされた経済学書を読むわたくしにとっても、読んでいて好きになる経済学書と、そうはなれないものがある。どちらかと言えば、わたくしは、G.タロックの好悪の感覚よりも、A.B.アトキンソンの好き嫌いの趣味のほうに惹かれるし、J.ブキャナンや G.ベッカーの本は理論的にはエキサイティングなのだが、A.センの本を読むほうが心地よい。経済学というのは、どうにもそういう性格――そしてわたくしにとっての魅力――をもっている。……経済学――特に分配政策とかかわりをもつ経済学――というものは、自然科学のように、一つ一つのテーマについて勝負あったと言う形で発展していく学問ではなく勝負のつき方はいつもあやふやで、互いが互いを無視した流派が、並存して世に存在しえるのである。そしてもし、経済学の根っこの部分が、かなり個性的な好き嫌いの感覚に左右されるのならば、互いの考えに勝負などつきようもない」。

8 年ほど前に書いた文章――まだ 30 代の時に書いた文章――ですけど、『at プラス』今月号で部分的に触れていることと同じですね――進歩なし(?)。